

は、基本的枠組として中世を通じて存続し、この意味において中世における the presence of Stoicism を主張している。だが、こうした著者の見解に対し、たとえば中世の運命論に関し、たしかにその発端はストアの運命論であったにせよ、そこに実際に影響を及ぼしたのはネオプラトニズムやキリスト教の解釈を経て展開されたものであって、ストアの運命論そのものの存続は認められないという批判ができないわけではない。筆者のみる限り、G. M. Ross がこうした見地から書評している (*The Classical Review*, vol. 34, No. 2, 1984 所収)。

### 金子晴勇著『アウグスティヌスの人間学』

昭和57年，創文社，vii+431+18 頁

片 柳 栄 一

著者は先に『ルターの間人学』を著わし、日本のルター研究に大いなる刺激をもたらしたのであるが、著者がルターと並んで長年取り組んで来たアウグスティヌスに関する研究を集大成したものが本書である。著者は自らの人間学的方法について序論の最後のところで次のように述べている。「一般に思想は基礎経験のロゴス化において形成されるが、人間学的方法はこのロゴス化が生じる第一次の過程を解明するもので、たいていの場合、人間に最も身近な心身に即して思想が自覚的に形成されはじめ、やがて第二次のロゴス化において世界観としての形姿が整うようになる。したがって人間学的——人間論的といっても同じある——研究は基礎経験が思想へと固定化する以前の思想の形成過程からその実存的意義を解明することを目的としているのである。私はこの方法によって思想の形成過程を学ぶことにより思想の特質を的確に把握しうるのみならず、思想を私たちにきわめて身近なものとして

共感的に捉えることができ、こうして思想の理解が著しく促進されるものと確信している」(26—27頁)。

このような研究方法論としての人間学的方法の切れ味がよく示されている例を二つあげておこう。一つは、第一部第三章「理性と信仰」の中でその優位性について論じたところである。この問題に関するアウグスティヌスの基本命題は「理解するために信ぜよ」であるが、アウグスティヌスはこれと反対の方向を取る逆命題「信ずるために理解せよ」をも述べている。グラープマン以来「信仰の可信性を認識するいわば小さい理性を自然的理性とみなし、信仰の段階を経て到達する知性を超自然的理性とみなして、理性—信仰—知性の三段階の図式がある」(121—122頁)ことが定説となっている。これに関する諸説が検討されるが、著者は次のような注目すべき解明を与えている。「次に『信じるために理解せよ』という逆命題の働きについて考えてみたい。この命題が求めている理解を行なう主体は、信仰に先行するという、いわゆる小さい理性であって、信仰に先行するとはいえ、信仰から離れていないで、信仰の主体へ向けられた反省として働いて、信仰自体の可信性と不可欠性とを自覚する。信じるということは、自己によって立つことができず、他者に向かって寄りすがることである。したがって神の啓示を受けとる場合、信仰は信じられる対象ではなく、もはや自己に立ち得ないため自己を超えて他者に向かう主体の運動となる。……このような主体へ向けられた反省、もしくは内省分析こそもっともアウグスティヌスらしい特質である。そこには『人間学の問題設定』(リンク)が働いていて、信仰も人間学的自覚からその不可欠なる点がたえず省察されている。このような『先行する省察にもとづく啓示の受容』(レーヴェニヒ)こそ彼の思想の最も顕著な特質となっている。したがって『信じるために理解せよ』という命題は『理解するために信ぜよ』との根本命題をも認識するものであって、その優位性は時間上の優位にあるのではなく、人間学的自覚における先行性を言い表わしているといえよう」(122—123頁傍点筆者)。多くの研究者によって長らく論究されてきたこのきわめて微妙錯綜した問題に対して著者は、アウグスティヌスの思想の本質を的確についた解明を与えており、この著者の方法論の有効性が鮮やかに示されている。

人間学的方法の切れ味がよく示されているもう一つの例は、アウグスティヌスの

自由意志と恩恵について論じた第一部第五章である。アウグスティヌスの自由意志についての考えは初期の『自由意志論』と後期のペラギウス論争において変化したのかどうか、様々に論じられるところであるが、著者はきっぱりと次のように述べている。「アウグスティヌスは自由意志の存在を否定したことは一度もない。問題は自由意志が罪のゆえに『無力』になっていて、恩恵の授けなしには自律的に行為し得ない点である。自由意志は無力ゆえに存在しないと考えるのはルターであるが、無力であっても自由意志自体は働いており、これへと恩恵は愛により力を注いで、罪の拘束から解放すると説くのがアウグスティヌスである。この点で初期の『自由意志論』から後期ペラギウス論争にいたるまで変化はないが、変化しているのは自由意志の現実に向けての実存的自己理解である」(225頁傍点筆者)。初期のアウグスティヌスは信仰によって恩恵が獲得されると考えていたが、人間の罪の現実に対する「人間学的自覚の深まり」(206頁)によって信仰自体が神の賜物であると考えようになる。アウグスティヌスによれば「私たちが意志するようになるためには神の意志と私たちの意志とがなければならぬと神は欲している。神の意志とは召命であり、私たちの意志とは服従である」(シンプリキアヌスに答えた諸問題第一巻第二問十節)。このような考えは共働説のようにみえるが、著者によれば「実際は恩恵のみの神学に人間学的反省が加わって生じているものである」(209頁傍点筆者)。神の意志は召命であるが、神のあわれみによる召命も、人間の意志の同意が加わらねばならないのであるが、人間自身の現実には、自身の力だけではこの同意を喜びをもってはなしえない。著者はアウグスティヌスの言葉を引用しつつ、アウグスティヌスの恩恵論の核心を次のように述べる。「このように神が人間の意志を内的に動かすことなしには神へ向かって回心する運動は生じない。『意志自体は心を喜ばせ魅了するなにかが生じないなら、けっして動かされ得ない。しかるにこのことを生じさせることは人間の力には与えられていない』(ibid., I, q. 2, 22)。この結論こそ自由意志を弁護しようと努力して神の恩恵が勝利したとアウグスティヌスが述べていた事態にはかならない。自由意志は存在しているが現実において罪の下に売られた状態にあり、無力である。ただ神の恩恵から来たる召命と聖霊の注ぎによってのみ信仰への道に立ち向かうことができる。だから信仰も神の賜物なのである。ここにアウグスティヌス的恩恵論が『恩恵のみ』という形ではじめて成立

しているのである」(211—212頁傍点筆者)。後期のアウグスティヌスにおいて次第に強調されてゆく神の絶対主権性の主張の背後にあるアウグスティヌスの実存的自己理解がこのようにして明確に取り出されている。

この二つの例にみられるように著者は随処に、人間学的方法による傾聴すべき説明を与えているが、そうした著者の方法を支え、本書を貫いている著者のアウグスティヌス理解の根本にあるのは、アウグスティヌスが人間存在を「神への対向性」として捉えていたとする洞察である。この概念を最も良く表わしているのは、「あなたは私たちをあなたに向けて (ad te) 造られ、私たちの心は、あなたのうちに安らうまでは不安だからである。」という『告白』の冒頭にある言葉である。ギリシア思想とヘブライ思想の混淆の観を呈するアウグスティヌス初期の人間学を著者が扱う際の導きの糸になっているのも、この言葉に示されるような「神への対向性」として人間を捉える視点である。また自由意志と恩恵という一見対立する如く見える思想がアウグスティヌスの経験において深く豊かな統一をなしていることを論じてゆく第一部の後半においても、あるいはアウグスティヌスの心の概念に関して著者独自の見解が展開されてゆく第二部の初めのところでも、この「神への対向性」として人間を捉える視点がある核をなしている。そして著者によればこの人間理解は決して静的なものではなく、信仰の動態において理解されるべきものなのである。「したがって回心は『神に向かって』(ad Deum) という神への対向性の実現であり、神から (ab) の背反から転向して神のうちへ (in Deum) 帰りゆくものである。神への対向性は現実には背反から転向へという信仰の動態において、神に向かい立つ本来的な自己の認識と神から背反した非本来的な頽落した自己の告白において実現している。若きアウグスティヌスは回心と同時にこの信仰の道に立っているといえよう。ここに人格的な神との関係において自己を理解する宗教的人間学の新しい地平が開かれてきている」(54頁)。

このように本書は明確な方法意識をもって初期から後期に至るまでのアウグスティヌスの長きにわたる魂の遍歴を跡づけた労作であるが、最後に本書を読みながら浮かんだ疑問を一、二記させていただきたい。著者はアウグスティヌスの思想の発展を人間学という観点から捉えているのであるが、その際アウグスティヌスがいかにして新プラトン主義的な、つまり古代的、ヘレニズム的人間観の影響をしいに

脱け出し、キリスト教本来の人間観に達するに至ったかに焦点があてられている。その場合どうしてもギリシア的人間観は、克服すべき対象として消極的にしかみられないきらいがある。しかしアウグスティヌス自身にとっては、ギリシア思想そのものが、彼の主体的実存を覚醒し、真摯な宗教的探究へと促したという側面をもっていたのではないか、ギリシア思想とキリスト教思想がもっと内的に関連しあって動的にアウグスティヌスを突き動かしていたのではないかという疑問が残る。

さらにそれと関連するが、確かに著者が明らかにしてくれた如く、アウグスティヌスの思想は彼の深い人間学的な自覚を抜きにしては考えられないのであるが、アウグスティヌスにおいては、そうした自覚にもたらされた人間の問題が、さらに存在論的広がり、奥ゆきをもって捉えられている。回心の問題についてもアウグスティヌスは創造における *conversio* という形で存在論的思索を展開している。回心における恩恵の力も存在論的背景において考えられていることは、「たとえ神から離反している時にも何らかの仕方で触れられている光に身を向ける如くに、人は身を向けかえず」という *De Trinitate* XIV, 15, 21 の言葉が示している。著者もその問題を「神への対向性」という概念で把握しようとしていると思われるが、存在論的広がりにはまでは十分展開されているとはいえないように思う。やはりここでもアウグスティヌスとギリシアの存在論の関わりが、さらに深く問題にされねばならないのではないかと思われる。アウグスティヌスの宗教的人間実存の自覚を鮮やかに示してくれた本書から、そのような研究課題が提起されているように思われる。